

働き女子のごほうびセミナー

「働くということ」

3. 管理職と東日本大震災のときのこと

千葉： そうしたら、そのあとは？

庄子： そのあと、今度、市民課に異動になるわけなんですけど、企画課のときに係長、最後の9年目は課長になりました。

千葉：すごい。一気に昇進したんですね。

庄子： 一気にじゃないですよ。9年間で。

千葉： 9年でヒラ、係長、課長と。とんとんとんと。

庄子： とんとんというか、長かったの。そのあと市民課に異動したのが2010年です。震災の前の4月ですね。市民課に異動しまして、それで、異動して1年たとうという3月に大震災を経験するということですね。



千葉： 震災後は市民課長として奮闘するわけですよね。

庄子： 大変でした。

千葉： そうですよ。女性ならではの大変さがありましたか。

庄子： そうですね。あのときはものすごい大変でしたけど、ある意味、いい経験だったと今になれば思います。

どこの市町村もそうですけど、市民課というのは、いろんなお客さまが来ます。震災のときは特に、津波

で行方不明になった家族を捜す人、不安定になっていろんなことを言いたいから聞いてくれという人への対応。あとは、津波で亡くなった方の埋葬の手続きも市民課の仕事でした。あのとき、600人以上の方が津波で亡くなったので、職員はひたすら夜の10時すぎまで死亡届を受け付けて埋火葬の手続きをしました。市民課の職員の中には津波で家族が行方不明のままずっと仕事を続けた人もいて、当然おうちもない。警戒区域になって自宅に帰れなくなって市役所に泊まり込んだ女性職員もいました。ひたすら目の前の市民の対応に追われていたのが市民課の職員で、それは男性職員も女性職員も同じだと思います。ただ、そんな時、女性職員が職場の陰のほうで避難して離れている子どもたちと携帯電話で「いつ帰ってくるの?」とか「いつ会えるの?」と聞かれているのを聞くと、それはやっぱり大変だったろうなというのは今思いますね。当然、男性職員も同じような状況ではありましたが、やっぱり女性職員がつかったんだと思いますね。子どもと離れて暮らすのはつらいので、と辞めていく職員もいました。あのころはどこの自治体の職員も同じように厳しかったと思いますね。

そんな中で、私は課長で、管理職で、職員を目配りする立場にあるわけなんですけど、結局、私自身もカウンターに出て8時間近く立ちっぱなしで市民の対応をすることになって、管理職としては何もできなかった。唯一、これではみんなまいっちゃうということで、毎朝、ずんどうの大きな鍋に、おみそ汁だけつくって持って行って職員に飲ませていました。当時は、お店も閉まっていて買い物もできないし、何も手に入らなかったんですが、うちにおみそだけは樽で買っていたのがあったので、それで作りました。やっぱりちょっと温かいもので落ち着いてから仕事をしてもらいたかった。いちばん落ち着きたかったのは私なんですけどね。職員がよくやってくれていました。

よくいろんなところで話しますが、平時にあまり評価されない職員が非常時に力を発揮する、そういうことがあります。普段はあまり条例とか見ないで仕事を進めて、「いやいや、違うでしょ」っていわれる子が、ああいうバタバタとしたときに市民の前にずっと出て行って、怒られようが何しようがずっと収めていく。逆に平時のときに評価されている子はちょっと気後れしちゃうとか。そんなことがあって、管理職としてこういう面を評価しなきゃいけないと気づきました。その点は管理職としていい経験だったと思います。

千葉：でも、大変だったと思います。

庄子：あのような大災害のときの管理職はどうあるべきかというのは難しいですよ。平時から管理職というのは判断をいつも求められるんですが、ただ、ああいう大災害時になると随時大きな重い判断を求められるし、平時だと下から問題が上がってきて管理職が最終的に判断するんですが、大災害のときは一人一人の職員が判断しないと対応できませんよね、目の前の市民に。時には間違った判断をした場合もあるかもしれない。でも、それを全部引き受けなければいけないというのがやっぱり管理職だし、

あとは、そういうときこそ部下を信用して任せるところが強く求められるのかなというふうには思いましたね。

千葉： そういうことは、経験的につかみ取ってきたということですか。

庄子： そうでしょうね。ああいう災害のときには頭で考える暇もないわけなので、やっぱり経験かもしれないですね。あとは、当時、私は課長でしたけど、その上に次長、部長がいて、そういう職員を見ながら判断をしていくという、上に倣っていくというところもあったかもしれないですね。大胆な判断をする上司もいて、なるほどなと思ったし。

千葉： 庄子さんは、今は部長になられていますけど、係長になるとき、課長になるとき、さらに部長になるとき、そのときそのとき当然という感じで受けとめたのでしょうか。

庄子： 私は、最終的に部長にまでなりたいという目標があったわけではないのですが、たぶん、係長とか課長ぐらいまでは今の世の中の女性登用からするとなるんじゃないかな、ならざるを得ないんじゃないかなというふうに思っていて、そのためにも、今のポジションよりも一つ上のポジションを見て仕事を進めていこうと思っていたんですね。今は係長だけど、課長になったら私はどういう判断をするだろうとか、そういうことを思いながら仕事をしていました。さすがに部長までは想定していなかったのですが。今、若い女性職員にはそういう話はしています。「必ず次は係長になるんだ」、「次は課長になるんだ」、そのときにどうすればいいのか、どうしたいのか、ということをいつも考えたほうがいいのかというのはいつも後輩には言っています。



千葉： すばらしいですね。

庄子： いや、そんなことはないんですけど。私、たぶん、わりと気が小さいので、次を想定してないともたないとい

うか。なので、「どんとこい、いつでも何でも」という感じではなくて、いつもちょっと先を見ながらちょっと安心していたいということだと思います。

千葉：すばらしいです。

庄子：いえいえ。

千葉：これも余談ですけど、私などはほとんどそういうことを考えない人なんです。目の前に迫って来たところで「やるしかないか」となってドタバタとやるわけです。あまりよくないです。



庄子：いやいや、その瞬発力の差なんだと思うんです。私は瞬発力がないために、ちょっと先を見るんですね。その気持ちの小ささが出てるといふか。

千葉：管理職の声がかかっても、「自分の上司を見ていると大変そうでとてもできない」という自信が持てずにいる方が多いとか、管理職に就いても女性どうして足の引っ張り合いがあるというようなことを聞くことがあるんですが、そういったことはありましたか。悩んだことはないですか。

庄子：そうですね。あまりそこはないですかね。たぶん、前提として女性も登用されるべきだというふうにも思っていて、男性と同じように登用されるべきだ、それは女性だからということではなく、能力によって登用されるべきだと思っていましたし、そういう組織に私は幸せにもいたんだと思うんです。若いときからそういう組織にいたので、そこはあまりないですね。

千葉：恵まれた職場だったんでしょうね。

庄子：だと思います。やはり、若いときからいろんなところに出してくれる先輩がいたのがいちばんだと思いますね。